

堀川をめぐる人びと

堀川開削410年をふりかえる

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

維新から昭和初期を席卷した事業家 山田才吉

山田才吉 名古屋初の水族館を堀川河口に



「山才さん」としてガス・鉄道事業にも進出

山田才吉は、堀川河口に近い東築地の埋立地に、明治43年(1910)市から教育にふさわしい内容との了解を得て、回遊式のパノラマ龍宮館と八角形3階建ての本館からなる名古屋教育水族館を造り、海水浴場と隣合せに、料理と娯楽施設の南陽館を造った事業家である。さらに熱田電気軌道(株)を設立して内田橋から東築地までの堀川左岸に電車を走らせ、賑わいを生み出した。

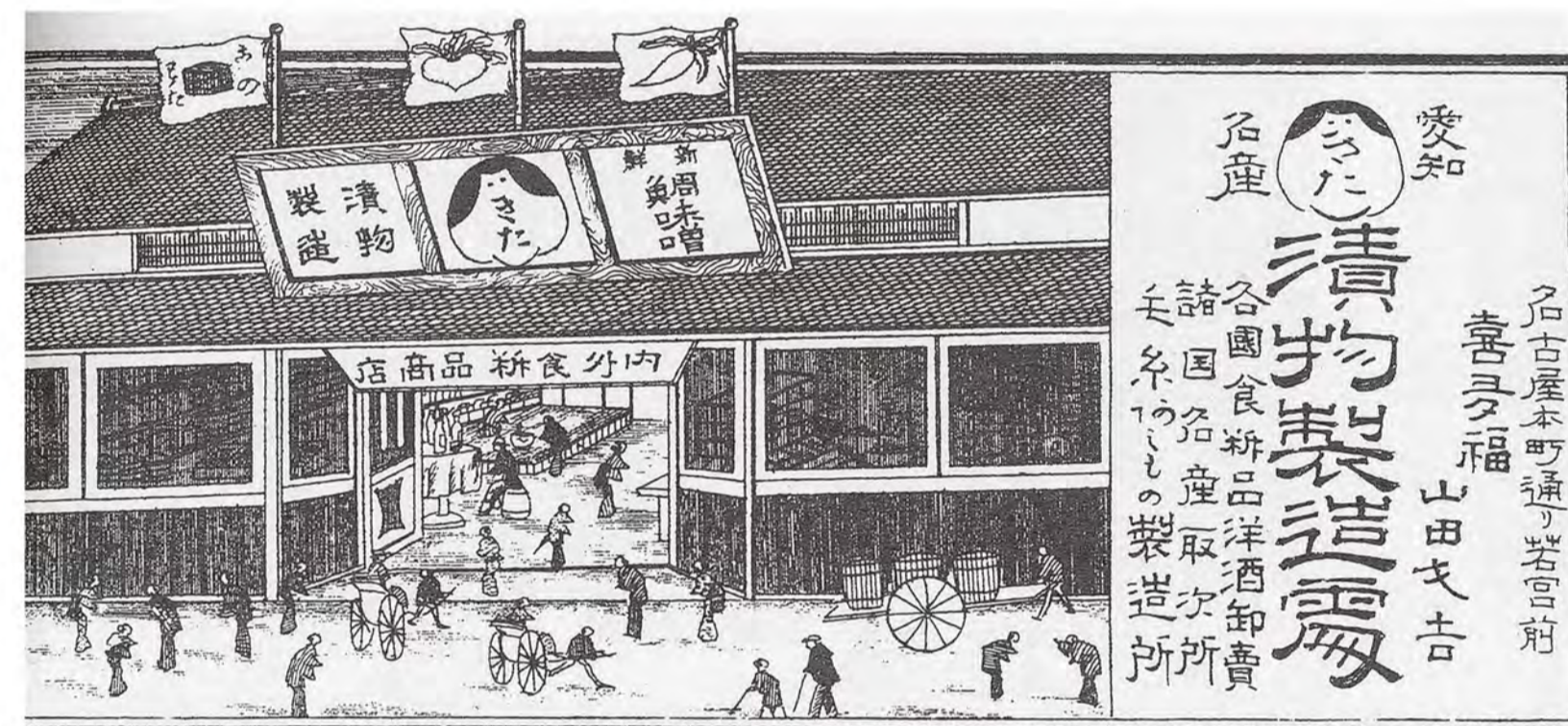
財を得て新聞、ガスや鉄道事業にも取り組むなど、「山才さん」として活躍した。

守口漬、大和煮缶詰、巨大レジャー施設などの先駆け

嘉永5年(1852)今の岐阜市大仏町で料理屋の長男として生まれる。14歳から品川や浅草で板前修業をし、明治8年(1875)23歳の時家業は弟に任せて瀬戸でうなぎの「山才屋」を開業、

2年後に熱田神戸町、その2年後大須に移す。守口漬の元祖でもあり、明治13年初秋に完成し甚目寺の萱津神社に奉納、河内守口産の漬物が尾張の茶人に愛用されていたので守口漬と命名した。14年に若宮八幡社近くに喜多福を開業すると、山才屋は閉じた。

明治16年缶詰に着目して、石狩缶詰所を奉公人に調べさせ、牛肉の大和煮缶詰を開発、2年後堀川の新開地に缶詰工場を造る。24年の濃尾地震発生直後には缶詰を救援物資で寄付、その後魚介・海藻類にして低廉化を図る。缶詰が評判を呼び、日清戦争時には陸軍に大量納入して財を成す。35年日本缶詰(資)が設立され翌年株式会社化、日露戦争ではさらに莫大な利益を得た。



上:喜多福広小路店(安藤商店) 下:喜多福漬物製造所
(個人蔵) (尾陽商工便覧より)

明治29年、丸田町交差点付近の広大な地に東陽館を建設する。東陽館の地には、豪壮な本館がそびえていた。2階建てで屋根は檜皮葺であった。庭には、山あり、池あり、そのなかにいくつかの亭が建っていた。池では舟遊びを楽しむことができ、人々は東陽館を人工の楽園と称した。今日でも国内で造られている巨大レジャー施設を、すでに才吉は明治の時代に造っていたのだ。

明治29年、愛知瓦斯の設立を出願するも、奥田正香の名古屋瓦斯と競合し、認可されるが不況で実現せず。明治39年に瓦斯会社設立で再び競合、知事の斡旋で一本化して奥田社長、山田常務で折り合いをつけ名古屋瓦斯が発足することとなり、東邦ガスに繋がる。

一方、明治30年の東陽館を皮切りに、南陽館、北陽館、聚楽園をあいついで造り、火事や台風などに見舞われるが、規模を縮小して再建している。事業は譲渡され、聚楽園や湯の華アイランドとして残った。東陽通り、南陽通り、竜宮町などの地名としても残された。

子宝に恵まれず、明治27年末、妻の遠縁にあたる娘を養女に迎え、名塚村の若者を婿養子山田才二とするが、早世している。昭和12年(1937)1月31日、聚楽園で84歳の生涯を閉じた。

アイデアを次々に現実化 名古屋政財界の顔

板前修業中に、味醂漬の香物を作り、江戸火消しの元締め新門辰五郎に褒められ、その後さらに改良をかさねて、洋酒卸売りと鯛味噌・漬物製造の「喜多福」に繋がっている。機を見るに敏な人で、喜多福開業は若宮八幡社の祭礼の5月15日、東海道線の名古屋駅ができた時には、守口漬に土産物としての先鞭をつけた。缶詰工場竣工式を碁盤割の老舗料亭河文で開催、地元の政財界人や軍人が参加したが、土産に缶詰と守口漬を渡し、直接賞味し、口コミで評価を上げる工夫もしている。

次々と新事業に取り組み、商業会議所の常務理事として中央卸売市場実現にも尽力、県会議員と市議員も務め、名古屋の政財界でも一目置かれる存在であった。



上:名古屋教育水族館 下:名古屋東陽館図 (個人蔵)

